松本市教育研修センターだより

No.43　令和７年10月31日

子どもも教師も「ウェルビーイング」！

松本市教育大綱は「すべての子どもの違いが、『自分らしさ』として認められていく」ことを目指し、「すべての子どもにやさしいまち」を掲げています。

10月にも、多様性を理解し、すべての子どもたちの「自分らしさ」と「学びの機会」の保障について考える研修を実施しました。その中から、インターネットを「公共の場」と捉え、良き市民としての人権意識と責任を育む「デジタルシティズンシップ教育研修」、そして教職員のウェルビーイングと「つながり」を強化し、子どもの権利がいかされる学校・学級づくりの基盤を築く「カリキュラムマネジメント研修」の様子を中心にお伝えします。

行動規範としてのDC教育を深化させる

デジタルシティズンシップ教育研修（10月２日実施）　昨年度に引き続き、講師に今度珠美先生をお招きし、「デジタルシティズンシップ教育（DC教育）」の研修を実施しました。デジタル技術を責任を持って安全に使いこなし、情報に主体的に関わる能力を育む「デジタルシティズンシップ教育」は、これからの社会に必要な力です。参加した先生方は、様々な想定場面から体験的に学びました。

1. 責任のリング

インターネットは「公共の場」であり、子どもたちに「自分の書いたことが隣に座っている友だちや見知らぬ世界の人々にまで影響している」という「責任のリング（私・共・公）」を意識することの大切さを学びました。「同じ現象でも、人によってとらえ方が違うからこそ、対話が必要だ」と語る先生もいました。

2. 行動を支える「立ち止まる力」

デジタル社会を自律的に生き抜くための行動規範として、「立ち止まる・考える・相談する」の３ステップを指導に取り入れたいという感想が、多数ありました。特に、「知識が私たちを立ち止まらせる」というメッセージは、多くの先生方の心に響いたようです。単に「ダメ」と教えるのではなく、正しい知識を持つことが、誘惑や急かされる場面でも「自分の行動へ大きな影響を与える」ことを教えてもらいました。

3. AI時代を見据えた教育

急速に進化するAIや、ユーザーを誘導する「ダークパターン」の仕組みを具体的に学びました。感想の中には、「子どもも大人も考え続けていくことが大切」とありました。AIに関しては、その特性を理解した上で、「どのようにAIと付き合っていくか」を考える学びの場をどう作るか、話し合っているグループもありました。

リフレクションの中には、「今回の研修は、ペアまたはグループでの対話形式が数多く取り入れられていたため、自分事としてじっくり考え発言でき、参加の先生方のご意見もたいへん参考になりました。」「校内で知っている職員を広げていくよりも、一斉に学べる機会があるといいなと思う分野でした。」とありました。また、「教職員だけでなく、児童生徒、保護者も知る機会があるといい」というように、DC教育への関心が高まってきています。

今回扱った授業資料は、研修センターにありますので、希望がありましたらご連絡ください。

人と人をつなぎ、チームで取組むカリキュラムマネジメント

第２回カリキュラムマネジメント研修（10 月 21 日実施）

本研修は、「教務主任等の悉皆研修」として位置づけられ、２回目となる今回も、前回に続き講師に、大阪教育大学教授田村知子先生をお招きし実施しました。今回の目的の一つは、参加者が、自校で仲間を巻き込み取組んだ「小さな一歩の実践」について、グループで協議し学び合うことです。

グループ協議の前に田村先生から「自校のいいところ、もっと伸ばしたいところを考えよう」と、H 高等学校の事例をもとに、カリキュラムマネジメント理論について学びました。H 高等学校は、「教師が講義をして、生徒が自分から学ぶのが高校だ」という教育観の先生が多く、やる気のない生徒が多い学校でした。その学校に赴任してきた新任校長のトップダウンとミドルリーダーによるミドルアップダウンにより、ワークショップ型で授業研究を行い、授業でつける力の「見える化」を行い、授業研究が定着化する学校へと変容しました。田村先生は、その事例から「**なぜ？を問い、めざすところ(ヴィジョン)を共有するのは、カリキュラムマネジメントの一丁目一番地。そしてウェルビーイングへの一歩**」とまとめました。

次に参加者が、グループになり各校で仲間を巻き込み挑戦した「小さな一歩の実践」について発表し合い、互いの実践のよさや課題について語り合いました。どのグループも、互いの実践に学び合ったり、仲間をつくる苦労の過程を語り合ったりしているうちに、30 分の協議時間はすぐ終わり、休憩時間になっても協議し合う姿が多くのグループで見られました。

その後、**山辺小学校の横澤亮介先生**（１学期の振り返りを対話形式にし、児童の実態を共有する実践）、**寿小学校の鈴木由美子先生**（プロセスを大事にし、子ども主体の行事への改善）、**清水中学校の丸山陽平先生**（職員自身が地域型探究活動を体験し、「大人探究」の企画を提案）、**松島中学校の元田亜紀先生**（シェアドリーダーシップ、職員 Meeting、探究的な学びの推進）による代表発表を行いました。

最後に田村先生が、代表４人の実践のすばらしさについて講評しながら、同じような実践をした学校のよさを意味付けてくださいました。そして、次のようにまとめられました。

【カリキュラムマネジメントのポイント】　「つながり」をつくろう

カリキュラムの中に（例：目標と授業、単元と単元、生活と学校の学び…）

人と人の間に（誰がチームの一員だろう？　どうやったら巻き込めるだろう？）

子どもたちの学びをよく見つめて（子どもも自分の学びを振り返り）、子どもたちの姿と教育活動の関係を語り合おう　共に学びづくりをする仲間を増やそう

《アクションのコツ》

取組みやすくて、成功しそうなことから小さく始めましょう（一人でも賛同者を見つけて、一緒に）

参加された先生たちが、自分の実践を熱く語り合い、仲間を巻き込むための工夫を学ぶことで、自校での「次のチャレンジ」へのヒントを得た、研修会になりました。

- 他校の先生方の「小さな一歩」の実践をお聞きし、今年度すぐに実践してみたいことや、来年度、チャレンジしてみたいことが具体的に見たり話を聞いたりすることができ有意義な時間となった。なかでも、同じグループの先生方の話の中で「職員同士の対話」の重要性を掲げる先生方が多く、自校をふり返ってみても少ないと感じたので、まずは職員同士の対話ができるような環境を整え、同一歩調で学校目標に向かっていけるようにしたいと思った。自分の「小さな一歩」も掲げて終わりではなく、要所要所でふり返りをしつつ、実践の手ごたえを得たいと思った。そして、それを次年度に活かしていきたいと思った。同じ立場の先生同士で情報共有することは大変意義あるものだった…
- この研修を通して、自分で考え、実践することの大切さを改めて実感しました。頭で理解しているつもりでも、実際にやってみることで初めて気づけることがあり、行動することの意味を深く感じました。…また、他校の先生方が紹介された「小さな一歩」の数々も非常に参考になる内容ばかりで、どれも本校の実践に活かせる可能性を感じました。今後、報告資料を丁寧に読み込みながら、自校の取り組みにどうつなげていくかを考えていきたいと思います。今回の研修を通して得た学びを、日々の実践にしっかりと反映させていきたいです。